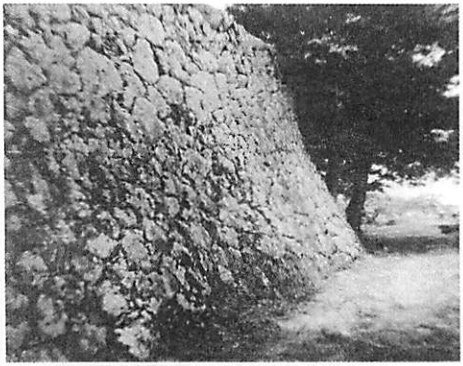
研究発表報告

佐伯城の石垣を考える

丁田　健太郎
（会員　佐伯市新女島）

佐伯城は、慶長七年（一六〇二）から慶長十一年（一六〇六）に、佐伯藩初代藩主毛利高政により築城された。



建物（作事）工事は、安土城の築城に参画したとされる市田祐定が担当した。峻険な山上に総石垣の城を築く工事は困難を極め、「一日三人切り捨て」と伝えられた。担当したのは宝珠、羽山勘右衛門（穴太積みの技師）であった。勘右衛門は、石垣の出来映えで高政と対立して、鉄砲で撃ち殺されたと伝えられている。佐伯城の石垣は「穴太積み」と思われる。

一、穴太衆の穴太積みの石垣とは

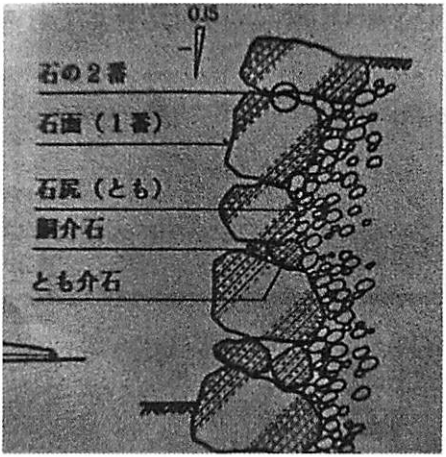
滋賀県大津市坂本は、比叡山延暦寺と日吉大社の門前町として発展した町である。この坂本の地に「穴太」がある。古くから五輪塔の切り出し加工を行っていた。

天正四年（一五七六）、安土城築城に際し、穴太より石工が呼ばれ石垣築きを行い、其の技術が諸国の築城にも用いられた。次第に石垣造りが上達し、五輪塔造りをやめて石垣築きを専業とするようになった。

穴太積みの重点事項として、次の点が挙げられる。

一、堅固な石垣にする。
一、石を無理に据え付けない。
一、根石（基礎石）は天を見せる。
一、石の合端は、二番より奥につける。
一、石面を通り面にする。
一、間石は、なるべく二個使用する。
一、石尻のとも介石は、真下に水平に打ち込む。

一、勾配は、真の勾配よりやや寝かせる。



穴太積の積み方

※天　＝あおぐ　上　上部
※合端＝合わせ目　合わした端
※とも介石＝後部　うしろの方の間に置く石

二、初代毛利高政の築城、普請、履歴

毛利高政は、佐伯城築城以前にも城作りに参画している。長崎県対馬の清水山城、撃方山城、向ノ平砦、大分県玖珠の角牟礼城の修復などが挙げられる。普請としては備中高松城攻略の際の水攻めの堤防造り、他に二条城、伏見城、駿府城、名古屋城、大阪城などがあげられる。以上の事からも、高政が城造りに精通していた事がうかがえる。

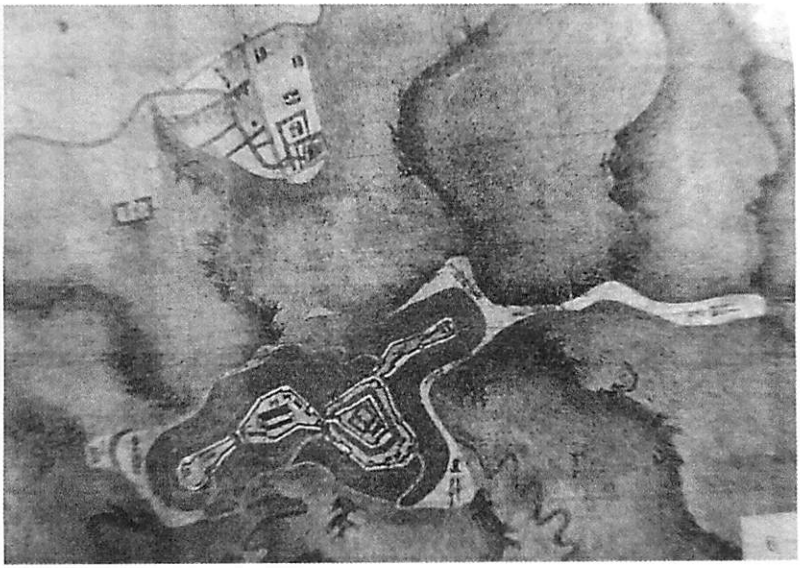
元文三年（一七三八）の古地図、御城並びに御城下絵図（佐伯教育委員会蔵・温故知新録第二巻付図）と現在の地図を比べても当時の測量技術の高さがわかる。

※清水山城（対馬）
厳原町にあり、宗氏の旧館金石城の外郭のような形で存在する。石垣を巡らせ一、二、三の丸がある。

※撃方山城（対馬）
対馬町大浦にあり、天正一九年（一五九一）に朝鮮への駅城として毛利高政により築かれた。

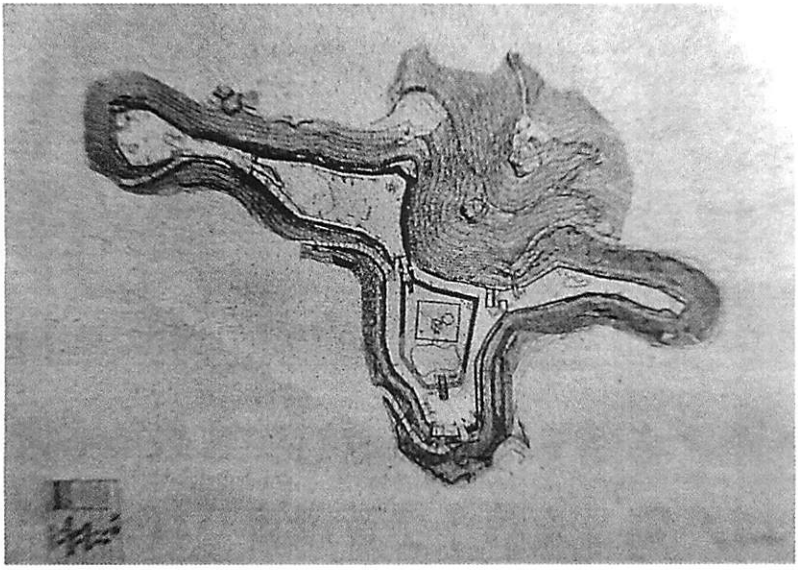
※向ノ平砦（対馬）
陣として使えるよう普請する（陣城普請）

※角牟礼城（玖珠）
玖珠郡森町の角埋山にある石垣と土塁で囲まれた城で弘安年間（一二七八～八八）に築かれた山城

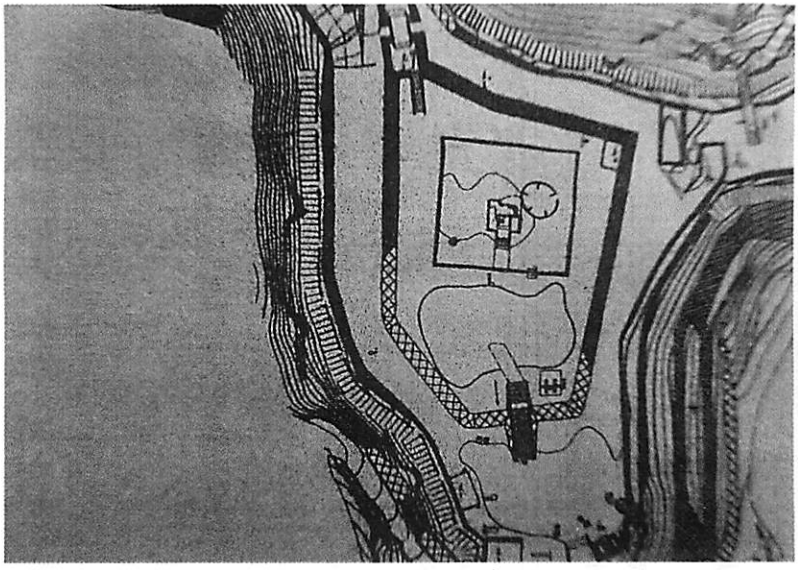


御城下絵圖（元文３年）部分

御城下絵圖（元文元年）部分



佐伯城測量図（縄張り図：平成 26 年）



佐伯城測量図（天守部：平成 26 年）

三、佐伯城の特徴

山城の堀切は、他の山城にはあまり見られない。二の丸から天守への通路、曲輪から曲輪への通路の形状は人一人しか通れない状況である。

本丸から二の丸への通路として廊下橋がある。この橋は敵が攻めてきた場合、切り落とす仕組みである。

四、佐伯城の石垣の積み方

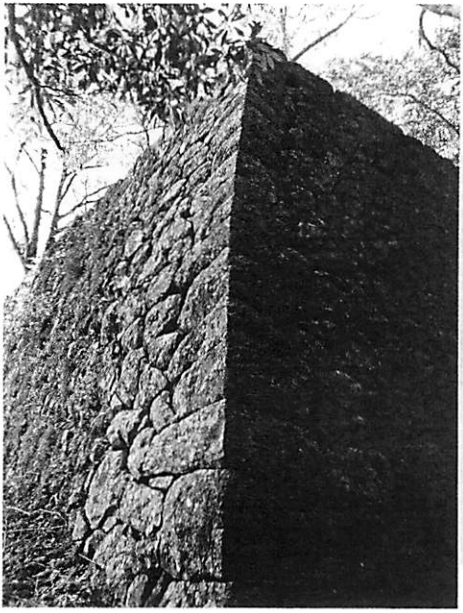
石垣の積み方は殆どが「野面積み」で所々に「打ち込みハギ積み」が見受けられる。「野面積み」とは、自然石をそのまま積み上げる方法で、「打ち込みハギ積み」は表面に出る石の角や面をたたき、石同士の接合を減らす方法である。

「切り込みハギ積み」は、方形に整形した石材を積み上げる積み方である。

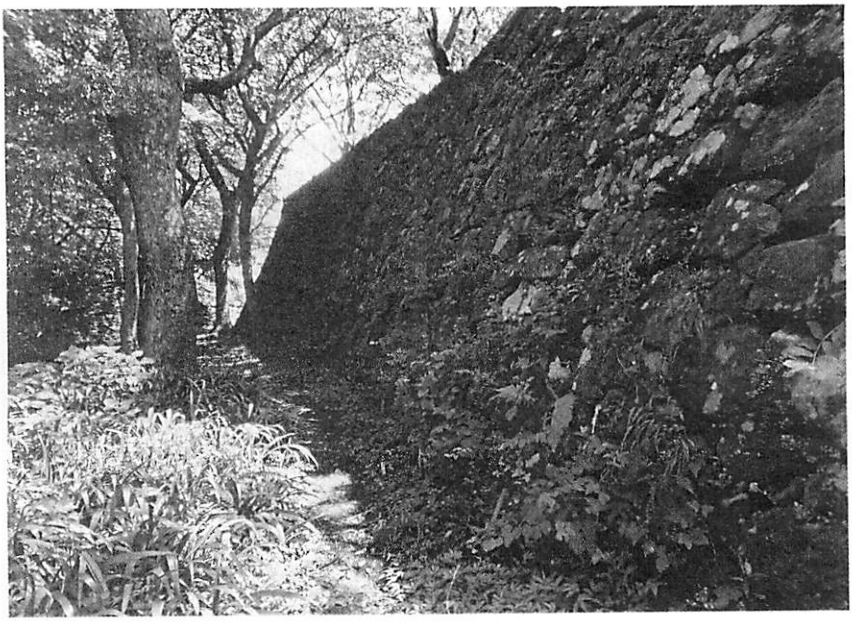
本丸から二の丸への通路

二の丸から西の丸への通路

本丸の裏側にただ壱ヶ所、角石（隅石）のある場所がある。角がまっすぐに一本の線で描かれている。これは「算木積み」と呼ばれる技法で、より石垣を堅固にするために作られる技法である。佐伯の鶴屋城の石垣の中ではこの他には見られない。

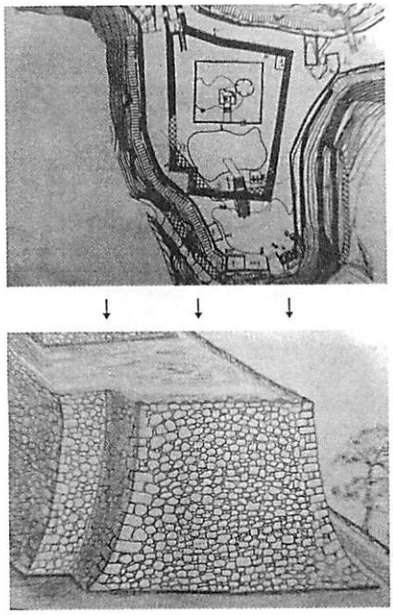


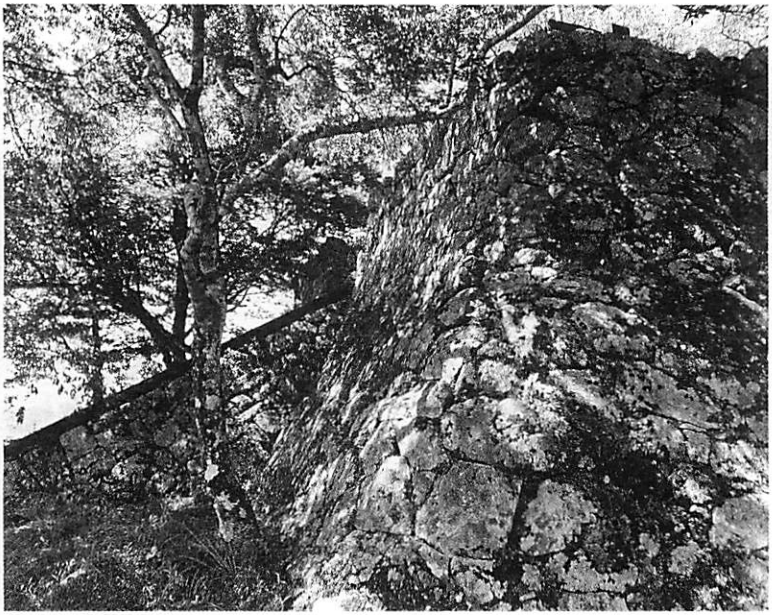
角石（隅石）のある石垣



五、佐伯地方の城郭石材について

一般的に城郭に使われる石材は火成岩（安山岩・玄武岩・花崗岩）である。佐伯城の石垣は、堆積岩（砂岩・泥岩・石灰岩）であるため、石材の採取に困難を極めた。海岸から採取したものが殆どである。そのため天守閣の石垣に角石が一ヶ所しか使われてない構造になっている。角石は九十度以上の角度では施行できない。角石が多く収拾されていたら、天守台の構造もこんな形に変わっていたかも、羽山勘右衛門も高政から鉄砲で撃たれてないかもしれない。

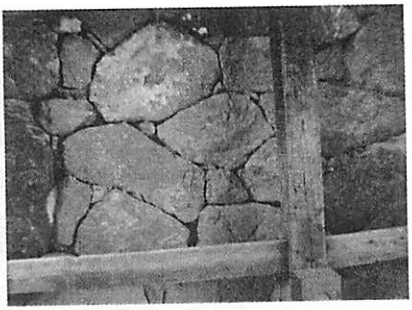




本丸の石垣が角石（隅石）でなく、丸いカーブをしている
（階段は明治以降に作られた）

六、櫓門の石垣

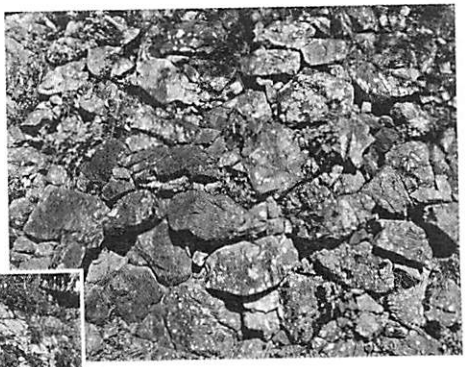
櫓門の石垣には、海から採取したため蛎殻（かきがら）が付着した跡が残っている。風雨にさらされてないので石の変色も見られない。三の丸の石垣の左右で積み方の違いがある。櫓門より左が野面積、右側の一部が「打ち込みハギ積み」である。

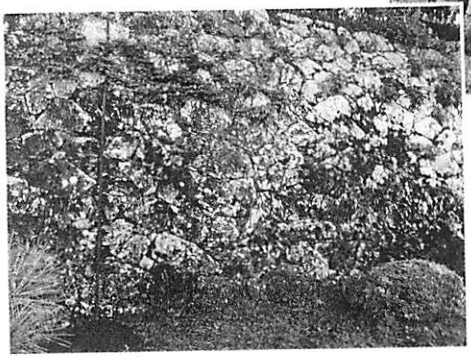


三の丸櫓門の石垣には蛎殻などが就いた跡が白く残っている

左の石垣の石の中央上部に蛎殻の白い紋様が見られる。他の石垣にも見られる

野面積みの石垣→
未加工の自然石を積みあげた石垣。大小いろいろある

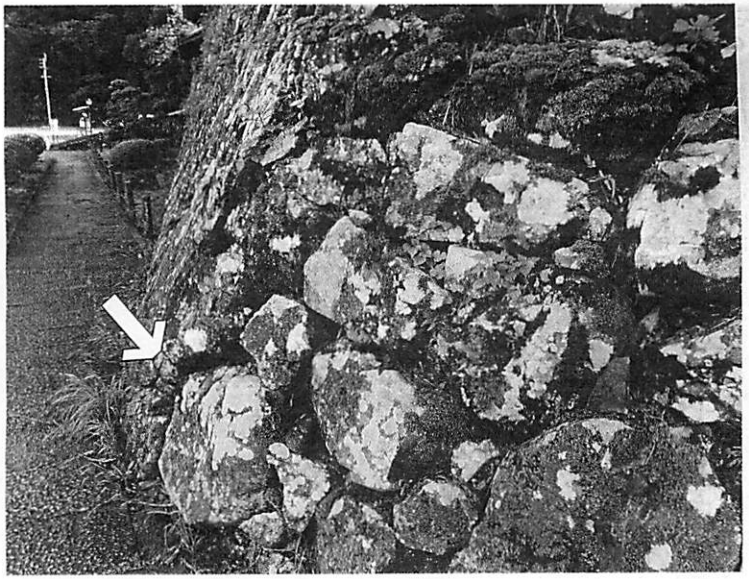




←粗割石の接合部を加工し隙間を出来るだけ減らした作り方。打ち込みハギ積みといわれ乱積と布積がある（打込み乱積）

七、石垣の孕みについて

石垣が各所で、樹木等により孕(はら)んでいる。



孕みの見える石垣

八、城山の石垣の大切さ、保護について

城山の自然林は保安林になっている。自然林は日々変化しています。植物のシダやコジイの大切さは理解できるが、まだ四〇〇年は経っていない。

この石垣は、すでに四〇〇年以上の歴史を刻んでいる。城山の築城時は樹木は殆どなかった。敵の襲来に備えて敵が見えるように樹木は伐採していた。松の木とケヤキは、籠城の時に必要であったと伝えられている。

佐伯の歌人、中根貞彦は次のような歌を詠んでいる。

「松はみな枯れしときけど城山は昔ながらに樹の茂る山」と詠んでいる。（中根貞彦歌集―懐かし城山より）

佐伯城の石垣は、佐伯のシンボルとして大切にしたいものだ。石垣の孕(はら)みや傷みの調査が今後行われると思うが、地域全体の問題として考えて行きたいと思います。

【中根貞彦】

明治一一年二月臼杵市二王座(におうざ)片切八三郎の三男として生まれる。高等小学校卒業後、佐伯の中根家の養子となる。昭和三年創立の三和銀行初代頭取、貴族院議員。齋藤茂吉門下の歌人として有名。三の丸に歌碑がある。